土と窯が造り
上げた街並み

窯業の町備前

日本六古窯の一つである備前焼の産地は、兵庫県境となる岡山県の東端備前市伊部（いんべ）一帯で、その歴史は平安時代に遡ります。幾日も焼かれる備前焼は堅牢で、すり鉢を投げても割れないとまで言われるほどです。初期は青灰色をした瓦、皿、大甕などを焼いていましたが、中世になると現在の備前焼の黒褐色に近い、焼き締まった品質へ進化します。これらの品物は瀬戸内海航路や山陽道によって運ばれ、尾張の常滑焼と競っていました。

室町時代末期に築かれた南大窯、北大窯、西大窯の三大窯が江戸時代に入っても多くの品物を生みだしましたが、後期に有田や瀬戸などで磁器が量産されるようになると、備前焼は人気が下降していきます。このため、50 日要した焚き上げが 8 日間でできる小規模で焼く天保窯がつくられ、少量生産で続けられていました。

このような備前焼にとって冬の時代を迎えた伊部では、常滑より招いた職人から土管の製作技術を学び、新分野に挑戦します。土管とは粘土を焼いてつくった円管で、排水路や煙突などに用いられてきました。古くは木製や竹製の管が用いられ、昭和 2 年に陶製の管を陶管と定められましたが、現在ではコンクリート製の円管も含めて土管と呼ばれています。

明治 20 年（1887）、伊部商会に続いて土管製造会社が設立され、一時は日本有数の土管製造出荷量を誇ったほどです。わが国のインフラ整備に欠かせない素材として利用されましたが、常滑も含めて製造は終焉を迎えます。しかし、日本の地下にはこの土管が活躍しているのではないでしょうか。

一方、稲垣兵衛と加藤忍九郎が三石産のろう石を用いて、明治 19 年（1886）に耐火煉瓦の製造を始めました。その後明治 25 年に株式会社化され、現在も窯業の町を引き継いでいます。

■位置図

室町から江戸時代の共同窯「伊部南大窯跡」

天保窯

備前土管を窯の土台に用いている

宇佐八幡宮の大型宮獅子
（高さ約 1.4 m、胴回り約 2.5 m）

蜂ノ子付土管
溜池の水位調整のため竪樋として、従来木樋などを用いていたが、明治 23 年頃に伊部で土管の製造技術を応用して考案した
【和気町 歴史民俗資料館蔵】

備前焼の窯が並ぶ備前市伊部の街並み